

IX 第7の神のことば 「姦淫してはならない」

出エジプト 20:14、申命記 5:18

20:14 姦淫してはならない。

出エジプト 20:14

はじめに

今回は神の第七のことば、俗にいうラッキーセブンに当たるが内容は実に重いものがある。第五の神のことば「あなたの父と母を敬え」同様、家族の保護を目的とする教えである。ところが今日、このみ言葉はその重さに反比例するように軽視され、疎んぜられているのである。一般社会はこれをもって、十戒を後生大事に教えているキリスト教への厳しい評価を下しているのではないだろうか。いわく、「どうにもならない時代遅れ、頭の固い、博物館入りの古代遺物」ということである。この神の教えは現代的な意義を失っていると思われる。実際世の現実、婚外交渉（不倫）、婚前交渉花盛りである。フリーセックス、同性愛者の権利要求、売春（買春）、援助交際、性産業の日常化と低年齢化等々挙げればきりが無い。この事態をキリスト者が「混乱」と表現するも、一般にはそれが常態化しており、もはやどちらが正常なのかわからなくなっているというのが現実である。

このような時代であればこそ姦淫してはならないという神のみ教えは現代的課題を持っている。キリスト者が、かつてイスラエルの民が異教徒の宗教と不道德な性的風習に染まることを避けるように、生きる道を教えられた神の掟と定めを、今こそ証しすべきであると思われるだろうか。『あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである（出エジプト 19:6）。

神は、聖なるものとされたご自分の民に聖なる生き方を求めておられる。キリストの教会は、キリストに属するものとその子どもたちに、その使命と特権を今まで以上に教え、論すことが求められている。

1. 神聖な結婚生活を求めて

先ほど掲げた出エジプト記の19章6節は、十の神のことばの序言の意味を持っていることを思い出していただきたい。出エジプト20章2節のことばである。「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】である。」

このシリーズの二回目に、「出エジプト記は神とイスラエルの民との契約が記された書であると同時に、イスラエルの民の贖いの書でもある」と述べた。贖いの目的は、祭司の王国、聖なる国民となすことであった。

聖なる民とされた者は、聖なるものとしての生きる道がある。それは、結婚生活においても求められる。今回もハイデルベルク信仰問答にその解き明かしを求めたい。

ハイデルベルク信仰問答 問 108 「第七戒は、何を求めていますか。」

答 「すべてみだらなことは神に呪われるということ。それゆえ、わたしたちはそれを心から憎み、神聖な結婚生活においてもそれ以外の場合においても、純潔で慎み深く生きるべきである、ということです。」(吉田 隆訳)

聖書は「性」を尊重し、結婚における夫婦の性の交わりの祝福を創世記のはじめから教えている。「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。増えよ。地に満ちよ』」(創世記 1:27~28)。くどいようであるが結婚の制定のみことばも引用しておく。「また、神である【主】は言われた。『人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう』」(創世記 2:18)。さらに「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」(創世記 2:24)とも言われた。神が人間に与えられた性の交わりは、本来互いを尊敬し、信頼し合う最も深い関係である夫婦の交わりの中に与えられたものであった。それ故にそれを破る性的な交わりは神に呪われるものであると戒められている。

さて、**問の第 108** は「神聖な結婚生活においてもそれ以外の場合においても」と述べている。この第七の神のことばは結婚生活に留まらず、独身生活においても求められている。それは「純潔」と「慎み深く生きる」という生き方である。その生き方は、既婚者、未婚者を問わずイエス・キリストによる贖いを受けたすべての人に対することばであり、使徒パウロによって不道德なコリント教会に書き送られている。

「あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい」(I コリント 6:19~20)。

ここで、「あなたがた」と呼ばれる人々はその前の 11 節に規定されているキリスト者である。「主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」すなわち、キリストにあって聖なるものとされている私どもは、霊と魂とからだのすべてにおいて救われており、全存在を神に差し出して生きる者とされている。尊敬する故吉持章先生の折に触れて語られたお言葉を思い出す。「われわれは、すでに買い取られたものだから。」

2. 聖霊の宮として生きる

先のみことばに、「あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり」と記されている。神聖な結婚生活を生きる目的がここにある。

ハイデルベルク信仰問答 問 109 「神はこの戒めで、姦淫とそのような汚らしいこと以外は禁じておられないのですか。」

答 「わたしたちの体と魂とは共に聖霊の宮です。ですから、この方はわたしたちがそれら二つを、清く聖なるものとして保つことを望んでおられます。それゆえ、あらゆるみだ

らな行い、態度、言葉、思い、欲望、またおよそ人をそれらに誘うおそれのある事柄を禁じておられるのです。」

この問答は、キリストの尊い十字架の血潮によって贖い取られ、聖霊の宮とされた私どもが、自分のからだと魂に対する所有権を失っており、それゆえにキリストに買い取られたからだを聖霊の宮として「清く聖なるものとして保つ」ことを望まれているのである。

先のコリント人への手紙第一のみことばによれば、姦淫はからだだけでなく、霊的なことにおいても聖霊の宮を汚す罪であると教える。「あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。『ふたりは一体となる』と言われているからです」(Ⅰコリント 6:15~16)。

第6の神のことばで「殺してはならない」と教えられた。殺すということは、同じ神の似姿を持つ相手を抹殺し、その人の中にある神を殺すことであつた。第7の神のことばが「姦淫してはならない」と教える罪は、同じく神の似姿を持つ者の中におられる神を侵害することであると言える。相手の中の神の似姿を見失って、相手をモノとして考え、欲望の対象としてしか見ない人間観こそが、姦淫の罪の大きさであると言える。

この問答は神聖な結婚生活の原動力についても教えている。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり」という先のみことばは、主イエスを信じる者のうちに宿っておられる御霊の働きに信頼して、清く生きることを示している。性は、本来神から与えられた人間の尊厳にかかわるものであり、結婚における夫婦の性の交わりもまた、神が祝福として与えてくださったものである。夫と妻は神にあって互いを愛し、いたわり、敬い、受け入れ合うときに結婚生活は幸せなものとして大きな喜びと祝福をもたらしてくれる。神が与えてくださった祝福は、自分の妻を重んじることであり、自分の夫を重んじることで、霊と肉体をも含めた日々の生活を大切にし、それを喜びとする。互いを重んじるということがその喜びと祝福を与えてくださった神を重んじることになる。姦淫とは、その尊い喜びと神の祝福を奪う行為である。それ故に、神は姦淫を禁じておられるのである。

その尊い結婚生活には戦いがあり、誘惑も訪れてくる。お互いの欠点ばかりが目についてしまうときもある。相手の弱さを受け入れることができず、罪を赦すことも、相手があるがままに受け入れることもできず、憎んでしまうこともある。その原因は、キリストの救いに与かった私どもの内に残る罪の残滓(ざんし) (残りかす)にある。その罪は私どもを性的な誘惑へと誘い、神のみ前でした愛の誓約を破り、破局に至らせることもある。その現実を知るゆえに、問答は「わたしたちの体と魂とは共に聖霊の宮です。」と告白する。ここで、ローマ人への手紙8章を引用する。

「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してあ

りません。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です」(ローマ 8：1～6)。

「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬことになります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きています。神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです」(ローマ 8：13～14)

3. 姦淫としての偶像礼拝

姦淫について旧約聖書は「大きな罪」と表現している。アブラハムがゲラルの王アビメレクに自分の妻サラのことを妹と偽って、危うく窮地に陥れる罪を犯したことが創世記 20 章に記されている。アブラハムが自己保身のために最愛の妻に姦淫の罪を犯させる危機から神は守られたのであった。20 章 9 節でアビメレク王はアブラハムを面詰した。

「アビメレクはアブラハムを呼び寄せて言った。『あなたは何ということ私たちにしたのか。私がいったい、罪となるどんなことをあなたにしたというのか。あなたが、私と私の王国に大きな罪をもたらそうとすることは、あなたは、してはならないことを私にしたのだ。』」

旧約聖書のテキストは、預言者イザヤ、エゼキエル、ホセアなどによってヤハウエに対するイスラエルの偶像礼拝の罪を、姦淫という「語」であらわしている。「大きな罪」である。ホセアの預言を味わっていただきたい(ホセア 4：7～13)。

この古い厳しい預言者のことばは、今日の世相を厳しく糾弾していると言える。夫婦が、互いの愛に全存在を賭けて生き抜くことができないということは、神に対する淫行の行為をしていることに他ならない。しかも、預言者たちは淫行の民イスラエルをなお愛し続ける神の愛を説き続けているのである。(ホセア 14：4～8)。

むすび

新約聖書エペソ人への手紙 5 章 21 節から 33 節を共に味わいと願う。

キリストが十字架で死んで与えてくださった救いは、夫婦の救いのためであったと言えるのではないかとさえ思える箇所である。キリストが教会を愛してご自分の命を犠牲にされたように、夫は妻のために死ぬことができるかと問われている。そして妻もまた教会が主に仕えぬくように夫に仕えぬく生き方が、「御霊に満たされて」(エペソ 5：18)「光の子どもとして歩むとき」(エペソ 5：8)可能になると約束されている。そこに姦淫の罪の入り込む余地がないと願うのである。